

---

# 古代アメリカ学会会報

第29号

---



「ペルー オリャンタイタンボ遺跡 太陽の神殿の壁」(2008年12月撮影) ©多々良 穰

---

## 目次

---

- ◆会員からの投稿
- ◆シンポジウム・研究会情報
- ◆研究大会報告
- ◆事務局からのお知らせ
- ◆新役員紹介
- ◆編集後記

---

2011年1月

\*本稿掲載文・写真の無断転載・複製を禁じます。

●よりグローバルな国際環境考古学会と「環太平洋の環境文明史」

青山和夫（茨城大学）

2010年12月1日（水）・2日（木）に、私のふるさと京都市にある国際日本文化研究センター（日文研）で国際環境考古学会（AEA: The Association for Environmental Archaeology）の研究大会が開催された。AEAが1979年に創設されて以来、ヨーロッパの外で研究大会が挙行されたのは今回が初めてであった。AEA会員の多くが、ヨーロッパ人である。今回、アジア、アフリカ、オセアニア、アメリカ大陸からも参加者があったことは特筆に値する。よりグローバルな国際環境考古学会が実現したのである。本稿では、その概要を報告する（図1）。

(<http://www.envarch.net/events/index.html#Kyoto>)



図1 国際環境考古学会（AEA）の参加者  
（2010年12月2日） ◎青山和夫

研究大会では「ヨーロッパと中近東の環境と諸文明」、「中央アジアと東アジアの環境と諸文明」、「東南アジアとオセアニアの環境と諸文明」、「環境考古学：最近の研究動向と未来」をテーマにした研究発表セッション、「環太平洋の環境考古学」の特別セッション、およびポスターセッションがあった。私は、東北大学の先輩である日文研の安田喜憲博士から依頼を受けて、2日午前の特別セッション「環太平洋の環境考古学」の座長として、研究発表者を選定し、司会を務めた。東北大学1年生の時に、私は安田博士の『環境考古学事始』（NHKブックス、1980年）を拝読して強い感銘を受けた。今回の研究大会は、その出版と安田博士が開始された環境考古学研究の30周年を記念して企画された。30年後に、まさか自分がAEA特別セッションの座長を務めることになるかと

は想像もしなかった。

「環太平洋の環境考古学」の特別セッションでは、私が領域代表者を務める文部科学省科学研究費補助金新学術領域研究「環太平洋の環境文明史」（平成21～25年度、研究経費5億2470万円、<http://dendro.naruto-u.ac.jp/ppecc/index.html>）のメンバーに計5本の研究発表、アメリカ大陸から招聘した4名の研究者にそれぞれ研究発表をお願いした。新学術領域研究のメンバーの研究発表のうち、4本は古代アメリカ学会の会員によるものであった。

まず私が「Introduction to Pan Pacific Environmental Changes and Civilizations」と題して、平成21年度新学術領域研究の人文社会系で唯一選択された「環太平洋の環境文明史」の概要を説明した。領域研究の目的は、①環太平洋の非西洋型諸文明（メソアメリカ、アンデス、琉球列島、オセアニアなど）の盛衰に関する通時的比較研究を行う、②環境史の精緻な記録である湖沼年縞堆積物（1年に一つ形成される「土の年輪」）を用いた環太平洋の環境システムの変遷史と諸文明史の因果関係を詳細に明らかにする、③その歴史的教訓と今日的意義を探究することである。現在、30名以上の文系と理系の研究者が共同研究を実施して、新しい文理融合的な学際研究を構築中である。

次に猪俣健会員（アリゾナ大学）が「Environmental Change and Social Dynamics at the Maya Center of Ceibal, Guatemala」において、セイバル遺跡の最新の調査成果を環境史と照らし合わせて検証した。猪俣会員は、「環太平洋の環境文明史」メソアメリカ研究班の外部評価委員である。3本目は、井関睦美会員（慶応義塾大学）による「Coping with Disaster: Aztec Ritual Modification against Cyclic Drought」であった。井関会員は、日本人として初めてアステカ考古学を専攻して博士号をイギリスで取得した、「環太平洋の環境文明史」のホープである。研究発表は、考古資料と民族史料からアステカ王国が直面した自然災害について検討するという、極めて実証的なものであった。

鶴澤和宏会員（東亜大学）が「From Hunting to Herding: Zooarchaeological Approach to the Subsistence Change in the Circum-Pacific Areas」と題して、狩猟の衰退と家畜飼育の開始に関して先史アンデスと縄文時代の日本列島を比較した。鶴澤会員の動物考古学研究は、2010年度と2011年度の「環太平洋の環境文

明史」の公募研究の一つとして採択され、鋭意進行中である。またアメリカ人のマーク・ハドソン博士（西九州大学）ら計4名による「The Archaeology of Prehistoric Resource Exploitation in the Okinawa Islands」は、先史琉球列島における資源利用に関する学際的研究の成果についての発表であった。

特別セッションの後半は、私が以前から日本に招聘したいと強く願っていた4名の研究者による研究発表であった。AEAの他の研究発表の時間が20分であったのに対して、この4名の先生方には特別に25分ずつ発表していただいた。まずグアテマラ人考古学者バルバラ・アロヨ博士（フランシスコ・マロキン大学ポボル・ヴフ博物館）が「Early Agriculture and Sedentism on the Pacific Coast of Southeastern Mesoamerica」において、グアテマラ太平洋岸低地における土器、定住、農耕の開始と環境史に関する最新の研究成果について話した。アロヨ博士は、1987年にホンジュラス考古学会で知り合ってから、猪俣会員と私の親友であり、カミナルフユ遺跡国立公園長でもある。

首長制社会研究の世界的権威ロバート・ドレナン博士（ピッツバーグ大学）が、「Environment, Environmental Change, and Chiefdom Social Dynamics in Comparative Perspective」と題して、自らが調査を手掛けてきたメキシコのオアハカ盆地、コロンビアの北アンデス、中国東北部における首長制社会の発展と環境変化の因果関係について実証的に比較した。人類学部 Distinguished Professor のドレナン博士は、アメリカの National Academy of Sciences の会員であり、ピッツバーグ大学大学院の私の恩師である。

マヤ文明の世界的権威ジェレミー・サブプロフ博士（サンタ・フェ研究所長）が、「The Decline of Classic Maya Civilization: Potential Lessons」において、以前に考えられていたようにマヤ文明が9世紀に「崩壊」したのではなく一部の都市が衰退したこと、「マヤ人が消え去った」のではなく現在も力強く生き続けていること、およびマヤ文明の繁栄と衰退の歴史的教訓について詳細に述べた（図2）。サブプロフ博士は、アメリカ考古学会（SAA: Society for American Archaeology）の元会長、National Academy of Sciences の会員であり、ピッツバーグ大学大学院の私の恩師である（図3）。



図2 サブプロフ博士の研究発表（2010年12月2日）

◎青山和夫



図3 AEAの懇親会。左からサブプロフ博士、シート博士、アロヨ博士（2010年12月2日）

◎青山和夫

最後にペyson・シート博士（コロラド大学）が、「Resilience or Vulnerability of Ancient Middle American Societies to Sudden Explosive Volcanic Eruptions」と題して、メソアメリカと中央アメリカ南部における火山活動と社会の変化やレジリアンス（回復能力）に関する諸事例を検証した。シート博士は、私が尊敬するメソアメリカ石器研究の最高権威であり、エルサルバドルのユネスコ世界遺産ホヤ・デ・セレン遺跡、グアテマラ、コスタリカやパナマの調査でも名高い。

AEAの研究大会の参加者は100名弱であり、古代アメリカ学会の研究大会とほぼ同じ規模であった。古代アメリカ学会と同様に、各研究発表の後に質疑の時間が設定され、研究者の間で活発な意見交換が行われた。質疑の時間は、数千人が参加して研究発表の時間が僅か15分というSAAの研究大会にはなく、古代アメリカ学会とAEAの長所といえよう。古代アメリカ学会の会員4名、アメリカ人とグアテマラ人の研究者が「環太平洋の環境文明史」に関連し

た研究発表を行うことによって、国際環境考古学会のグローバル化に貢献することができた。私にとって一生忘れることができない、極めて有意義な国際学会になった。

アロヨ博士とサブロフ博士は初来日、ドレナン博士とシーツ博士は2回目の来日であった。猪俣会員、ドレナン博士、サブロフ博士とシーツ博士には、12月初旬の学期末というアメリカの研究機関に勤務する研究者にとって極めてご多忙な時期に来日していただいた。とりわけ、私が調査研究や留学中に大変お世話になった3名のアメリカ人の先生方は、11月30日に来日、12月3日に離日というハードスケジュールであった。しかし今回、日本政府の予算を使ってご招聘して、ほんの少しであるが大きな学恩をお返しすることができた(図4)。



図4 AEAの懇親会。ドレナン博士と筆者  
(2010年12月2日) ◎青山和夫

12月3日(金)午後、国際環境考古学会と連動して「太陽と古代文明」と題する公開講演会が日文研で実施された

(<http://www.nichibun.ac.jp/event/archive/koukai.html>)。招待講演者は、オランダのイングリーザ・スタイツ博士、アイルランドのマイケル・オコーネル博士、エジプトのフェクリ・ハッサン博士、安田博士と私の5名であった。日文研の講堂は、国際環境考古学会に参加した国内外の研究者に加えて、熱心な一般市民が訪れ、平日であるにもかかわらず、700名の聴衆で満員になった。計2名のベテラン同時通訳者が、40分の各講演の前半と後半をそれぞれ担当し、イヤフォンで聴くことが可能であった。

私は、「マヤ文明とアステカ文明における太陽と暦」と題して最後に講演を行った。最初に「世界で最も美しい言葉である関西弁を織り交ぜながらお話

し致します」と言うと、盛大な拍手が起こった。次にいつもの通り、愛する妻ビルマとの出会い、ホンジュラス生まれの長女さくら、ピッツバーグ市生まれの二女美智子の成長について熱く語ると、会場は笑い声でいっぱいになった。その後は「環太平洋の環境文明史」の宣伝も兼ねて私のペースで一生懸命に話して、最後まで聴衆を惹きつけることができた。寝ている方は一人もおらず、私の講演に熱心に耳を傾けて下さった。ポーランドのミロスロウ・マコホニエンコ博士が、「すごい講演だった。おめでとう！」と私を祝福してくれた。受付で販売した数十冊の拙著は完売であった。

外に出ると、夕暮れ時のふるさと京都の風が心地良かった。私は、第7期(2008~2010年)に引き続き、第8期(2010~2012年)の古代アメリカ学会役員(研究担当)を務めている。「いつの日か古代アメリカ学会の公開講演会を、このような大観衆をお迎えして盛大に行えれば良いな」と、思いを巡らしていた。

古代アメリカ研究者には、優れた研究成果を生み出し続けて、国内だけでなく諸外国で学術論文を出版し、国際学会で研究発表していく使命がある。それだけでなく、公開講演会・シンポジウムや一般書などを通じて日本社会にわかりやすく研究成果を還元し続けることによって、知の再生産が効果的に行われ、学術研究と一般社会のもつ知識の乖離が狭くなるように努めていかなければならない。そして社会的認知と高い評価を得て、日本政府や一般社会が、古代アメリカ研究に投資する価値をより明確に認識するようにしていく必要がある。

私は「まだまだ先は長いな」と思いながら、12月4日(土)の古代アメリカ学会の研究大会(早稲田大学)に赴くべく、京都駅から東京行きの新幹線に乗り込んだのであった。

#### ●IX Coloquio de Análisis Historiográfico 参加記 井上幸孝(専修大学)

2010年10月11~13日、メキシコ国立自治大学歴史学研究所(Universidad Nacional Autónoma de México, Instituto de Investigaciones Históricas)で3日間にわたって行われた研究集会に参加した。「第9回歴史記述分析討論会—先住民伝統の歴史記

述 (IX Coloquio de Análisis Historiográfico: Historiografía de tradición indígena)」と題されたこのイベントは、征服前後のナワトル文化を専門とするミゲル・パストラナ (Dr. Miguel Pastrana Flores) を中心として企画・開催された。毎日2つずつ、合計6つのセッションが持たれた (写真1: 筆者が参加したセッション6の様子)。セッションによっては参加者が100名を越え立見が出るほどの盛況ぶりであった。



写真1 セッション6の様子

方法論的な省察はもちろんのこと、古典期の碑文解読から植民地後期の古代史再解釈に至るまで、各セッションで多様な報告がなされた。日本においてのみならず、メキシコにおいても比較的マイナーな専門分野である歴史記述の研究が着実な進展を見せていることを示す内容であった。筆者の目から見てとりわけ有益な成果があったのは、以下の三点である。

一つ目は、マヤの碑文解読 (Erik Velázquez、以下該当するテーマの報告者名をカッコ内に示す) や絵文書 (Irineo García, Manuel Hermann, Raymundo Martínez) といったテーマが歴史記述の枠内で論じられる可能性が示唆されたことである。これは、当該研究分野がアルファベットの文字史料だけでなく、絵文書やメソアメリカの文字まで広がりを見せていることを意味する。

二点目は、特に既知の史料が多いナワトル文化圏における研究テーマの奥行き深さである。アルバ・イシュトリルシヨチトル (Tania Ortiz Galicia)、ムニョス・カマルゴ (Inga Hernández)、ポマール (Miguel Pastrana Flores)、『トルテカ=チチメカ史』 (Luis Manuel Vázquez Morales)、権原証書 (筆者) などの具体的事例研究が示され、個別の文書や記録者に関する詳細な議論が交わされた。

最後に、メソアメリカとアンデスの比較の可能性が示されたことが大きい。具体的には、ベタンソス (Clementina Battcock, Diego Márquez Valadez) やインカ・ガルシラソ (Diana Roselly Pérez Gerardo) といったインカ関係のクロニカ分析がメソアメリカ関係の事例研究と絡む形で提示され、その場での議論が行われただけでなく、今後の比較の必要性という認識が多くの参加者の間で共有された。

言うまでもなく、スペイン人によって征服される直前の社会・文化については、多くの文書史料が残されている。歴史記述の研究成果は、先スペイン期を扱うに際して文書史料から情報を拾いあげて利用する上で欠かせない。というのも、そうした先住民情報は主に征服の少し後に収集され、しばしば植民地時代固有の政治的・社会的力学関係に左右される解釈を経た上で、現在我々が知り得る「史料」として残されているからである。とりわけアルファベットで記述された史料をうかつに字義通りに理解して利用するならば、植民地社会の影響という「フィルター」を経た情報によって、実態とはまったく異なる誤情報や恣意的解釈を掴まされてしまうことすらある。考古学者と歴史学者、もしくは人類学者の間に、概ねこれらの史料が先スペイン期社会の再構築に有用であるという合意こそなされているものの、各々の史料が孕む種々の問題点はまだまだ十分には共有されていない。それら「史料」の批判的な読みは、今後、先スペイン期研究における史料利用にもっと反映させていく必要があると言えるだろう。

なお、今回の開催が第9回ということであったが、第1回が開かれたのは32年前 (1978年) のことであった。第1回にはエドムンド・オゴルマン、ホルヘ・グリーア、ロベルト・モレーノといった既に鬼籍に入った歴史学者をはじめ、ミゲル・レオン=ポルティージャ、今回も発表をしたホセ・ルベン・ロメロらが参加したとのことである。同じく第1回に参加したアルバロ・マトゥーテ (Dr. Álvaro Matute) が開会の辞で述べていたように、今回は第1回の開催時にはまだ生まれていなかった若い研究者や院生も多くその研究成果を発表した。メキシコにおいてこの分野の研究の裾野の広がりが少しずつではあるが着実に進んでいることをあらためて実感した次第である。

また、筆者は古代アメリカ学会会員の犬越翼氏とともに前回 (第8回) にも参加している。2004年5月に開催された第8回の成果は、Rosa Camelo y

Miguel Pastrana Flores (eds.), *La experiencia historiográfica. VIII Coloquio de Análisis Historiográfico*, México, UNAM, 2009 として出版されている。興味を抱かれた会員諸氏は、ぜひ同書にも目を通していただければ幸いである。

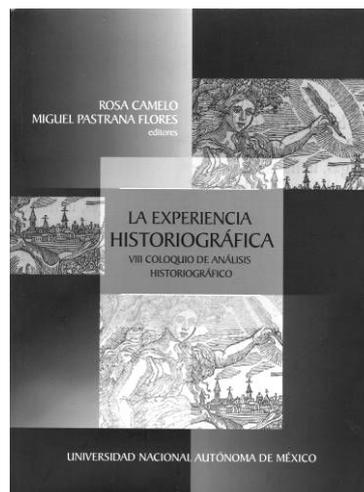


写真 2 第 8 回の論文集

(<http://www.iih.unam.mx/publicaciones/catalogoiih/fichas/500.html>)

---

---

## シンポジウム・研究会情報

---

---

### ●古代アメリカ学会主催第 2 回公開シンポジウム 「マヤ・アンデス文明の謎と神秘のベールをはぐ」

多々良 穰(東北学院榴ヶ岡高等学校)  
青山 和夫(茨城大学)  
坂井 正人(山形大学)  
吉田 栄人(東北大学大学院)  
井上 幸孝(専修大学)



図 1 公開シンポジウムの講演

2010年10月3日、仙台国際センターで「マヤ・アンデス文明の謎と神秘のベールをはぐ」と題する古代アメリカ学会主催の公開シンポジウムが、科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「研究成果公開発表」(B)の助成、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、TBC 東北放送、河北新報社の後援を受けて開催された。このシンポジウムの目的は、「謎」と「神秘」のベールに覆われた古代アメリカ

文明の実像に専門家の視点から迫り、誤った世界史観を是正するとともに、日本の世界史教育における諸問題を先史アメリカ諸文明の側から浮き彫りにすることであった。この文明の商業的消費には、必ずと言っていいほど「謎と神秘の古代アメリカ文明」というイメージが付加されているからである。講演タイトルと主な内容は以下の通りであった。

「中・高生の古代文明の知識と教科書問題」

多々良 穰

高校生を対象として実施したアンケートをもとに、彼らがイメージする傾向を説明した。古代文明はエジプトもメソポタミアも古代アメリカもあまり区別なく考えていることや、南米の要素(ナスカの地上絵やマチュピチュなど)をマヤと混同していることなどを指摘した。また、マヤ文明の情報源は圧倒的にテレビ番組が多いことがわかった。偶然にも、発表者は一週間前に「教科書に載せたい!」という番組に出演し、その収録の際にいかに視聴者向けに文言が操作されがちであることを痛感したこと、しっかり史実を捉える目を持ってほしいということを訴えた。最後に、古代アメリカ学会の「学術情報普及戦略班」の一人として、高校世界史教科書の記載内容をチェックした結果、編年などの記述に誤りがあることも指摘し、今後も世界史教科書の記述問題に関わっていくことを述べた。

## 「日本における謎と神秘のマヤ・イメージの形成」

吉田 栄人

『広辞苑』における「謎」や「神秘」の定義を見る限り、それらは「分からない」ことの謂いであることを説明した上で、その「分からない」ことには、現在の科学的知識を持ってしても説明ができないことと、科学的知識を持っていないがために説明ができないことがあることをまず解説した。前者を「絶対知」、後者を「相対知」と呼ぶならば、「謎」や「神秘」には、本来両者の基準からの説明が必要はなはずだが、「謎のマヤ文明」などというテレビ番組は「相対知」を基準としていることが多い。穿った見方をすれば、番組制作者は「絶対知」を敢えて隠しておいて、「相対知」のレベルで「謎だ、神秘だ」と言って視聴者を喜ばせていることになる。番組に専門家が登場するのは、「相対知」でしかないものを「絶対知」であるかのように見せかけるためであること、また専門家の知識も時と場合によっては相対的なものであることを説明した上で、「謎」や「神秘」が語られる際にはそれがどのレベルの知に基づいたものであるかを見分けることが重要であることを指摘した。

## 「マヤ文明と捏造された謎」

青山 和夫

「マヤ文明と捏造された謎」では、世界の諸文明はいわゆる「四大文明」だけでなく、一次文明であるマヤをはじめとするメソアメリカ文明やアンデス文明を理解しなければ、よりグローバルな「真の世界史」を学ぶことはできないことを強調した。だが、マヤ文明については、「学問的な謎」ではなく「捏造された謎」がテレビ番組などで煽られている。偽物の「マヤの水晶ドクロ」、2012年に世界が終わるとする「マヤ文明の世界滅亡予言」、マヤ文明は人間がつくったものでないとする「マヤ宇宙人説」、そして架空の「アトランティス大陸」伝説が、「捏造された謎」の例として挙げられた。また、マヤ文明の特徴として、鉄器がなくても洗練された「石器の都市文明」であること、主に中小河川や湧水を利用した「非大河灌漑農業を基盤とした文明」であることなどを説明した。発表者がこれまで関わってきたホンジュラスのラ・エントラダ地域とコパン遺跡を中心とした交換と手工業生産に関する研究、グアテマラのアグアテカ遺跡やセイバル遺跡の調査も紹介した。

## 「アンデス文明の謎と実像」

坂井 正人

ナスカの地上絵に関して、これまでマスコミなどで取り上げられた謎について再検討した。ここで扱った謎は以下の通り。(1) 地上絵は、誰によって、いつ制作されたのか、(2) 地上絵はどのような方法で制作されたのか、(3) 空からしか認識できないほど、地上絵は巨大なのか、(4) なぜ地上絵は破壊されずに残ったのか、(5) 地上絵は何のために制作されたのか。これらの謎とされてきたものを、最近の研究成果と照らし合わせてみると、(1)～(4)は概ね学問的に解決されているので、謎とは言い切れない。また(5)については、現地調査にもとづく実証的な研究が不足していることを明らかにした。最後に、発表者がナスカ台地で実施している地上絵の調査について紹介することで、今後の研究のあり方について論じた。

以上の四者の講演に引き続き、参加者から質問用紙を回収し、井上幸孝の進行のもと、主な疑問に答える形でパネルディスカッションを行った。そこで取りあげられ、パネリストによってコメントされた質問は以下のものであった。



図2 パネルディスカッションの様子

### ・旧大陸と新大陸の農耕文化の違い

旧大陸では栽培されていなかった作物が、先スペイン期の新大陸で栽培された。こうした作物を栽培する際に、南米アンデスでは、高度差を積極的に利用した農耕が行われた。(坂井)

### ・マヤと他地域で出土したものの違い・特徴

マヤ文字や図像が描かれている土器はわかるが、実用土器については他地域とかなり似ているものがある。(青山)

#### ・水晶ドクロがマヤのものと言われた理由

20 世紀にベリーズのマヤ遺跡で発見されたときから、実際には 19 世紀にドイツで製作されたものだった。しかし、10 年ほど前に制作されたテレビ番組で、ディレクターはその事実をわかっていたものの視聴率を稼ぐためにあえて水晶ドクロがマヤのものだと紹介した。(青山)

#### ・テレビ番組における問題点

始めからシナリオができており、どのように視聴者に興味を持たせるかを最優先に考えている。例えば「2012 年世界滅亡説」についても、マヤ暦で世界が「終わる」のではなく「暦は循環する」と表現すべきだという点で、先日の番組収録では意見が食い違った。(多々良)

暦を利用して「世界滅亡」を流布させるのはばかげているという感想を持つ。ノストラダムスの予言でも、結局何も起こらなかった。(井上)

#### ・マヤ暦の内容

マヤ暦は複雑だが、260 日暦と 365 日暦など様々な循環暦が組み合わされた。手と足の指を利用した二十進法が特徴である。話題になっている長期暦は、約 5126 年で一巡する。(青山)

#### ・アンデスの乾燥地帯での農耕の方法

ペルー海岸部の乾燥地帯の場合、降水量が少ないので、農耕に必要な水は天水ではなく、山から流れてくる川の水が主に利用されている。(坂井)

#### ・アンデスにおける首級の利用法

ナスカ出土の首級の場合、紐で持ち運べるような加工が施されている。南米の民族誌には、死んだ戦士のパワーを手に入れるために首級が作られたという事例が報告されているが、ナスカの首級についてはもう少し研究する必要がある。(坂井)

#### ・高校世界史教科書の修正に向けての現状

今日壇上にあがっている 5 人によって 1 年以上検討を重ね、修正点を洗い出した。平成 25 年度から改訂される高校世界史教科書に向け、その修正案を各教科書会社に送付したので、反映されることを期待している。(多々良)

#### ・高校世界史教科書に古代アメリカが少ない理由

古代アメリカについての情報を持っている執筆者が少なく、専門家が執筆に一切関わっていない教科書会社も多い。ただし、一昔前は「ヨーロッパ中心史観」が強かったが、最近はやや改善が見られる。(多々良)

真の世界史を理解するためには、古代アメリカを学ぶことも必要だが、新たな研究成果がなかなか教科書に採り入れられない。国は調査・研究に補助金を出しているのだから、それによって得られた新たな情報を盛り込んでほしい。(青山)

#### ・歴史家の絶対知は時代によって変わるのでは？

「絶対知」はあくまでも「相対知」である。歴史家の考えは「仮説」のはずなのに、教科書にはそのように書いていない。あたかも事実であるかのように教えなければいけないことに問題がある。授業では「仮説」であると補足して教えることが望ましい。(吉田)

#### ・メディアによる情報の捉え方

興味本位でテレビ番組を見ているときに、絶対知を得ると逆に面白くないと感じることはあるが、絶対知を社会的に共有することが望ましい。(坂井)

古代アメリカの考古学は、欧米人によって始められ、他者から見た歴史は「謎」や「神秘」で捉えられた。マヤは「神秘的な文明」というイメージが強いが、意図的に「嘘」を流すマスコミに対し、疑いの目を持ってほしい。(青山)

参加者のアンケートでは、マヤ文明やアンデス文明に関するもっと具体的な内容について知りたかった、という意見が多く、人々が学会に期待するものはやはりマヤやアンデスに関する新たな情報だったことがうかがえる。今回の報告の中にも「謎や神秘」という言葉にかけられた「ベールを剥ぐ」というよりは、「謎」の解明としての研究成果に焦点を当てたものもあった。「謎と神秘のベールをはぐ」というのは新たな発見(発掘調査の報告)を紹介するという意味にとった人たちが多かったのかも知れない。ある意味で、われわれ研究者は「謎や神秘」を剥ぎ続けなければならないが、テレビなどで紹介されているものはベールを剥ぎ足りないという見方もできるだろう。

なお、地元の東北放送テレビの夕方のニュース

( [http://skip.tbc-sendai.co.jp/01news\\_2/20101003\\_12258.htm](http://skip.tbc-sendai.co.jp/01news_2/20101003_12258.htm) ) では、次のように報じられたので紹介しておきたい。

古代アメリカ文明について考えるシンポジウムが3日仙台で開かれ、最新の研究からみて高校の教科書に記載されている内容は誤ったものとの発表がなされました。このシンポジウムは、古代アメリカ学会が主催したもので、およそ100人が会場を訪れました。

この中で学会のメンバーから、日本の高校世界史の教科書には、古代アメリカ文明について最新の研究とは異なる誤った内容の記載があるとの報告がありました。具体的にはマヤ文明は4世紀から成立し

た文明と記載されているが、学会の通説では紀元前6世紀からで、1000年もずれていると指摘しています。

学会では今後教科書販売会社に対し修正を求めていくなど、古代アメリカ文明についての認識を広めていきたいとしています。

---

---

## 研究大会報告

---

---

### 古代アメリカ学会第15回研究大会

2010年12月4日(土)に早稲田大学戸山キャンパスで開催された、第15回研究大会の発表者と発表題目は以下のとおりである。なお、当初予定されていた研究発表の部の山本睦会員(日本学術振興会特別研究員)による「ペルー北部地域における地域間ルート」は、発表者の事情によりキャンセルとなった。

#### —調査速報—

##### <前半>

- ・「アステカ王国拡大期の主神殿出土遺物」  
井関 睦美(慶応義塾大学)
- ・「エルサルバドル共和国における先スペイン期遺跡出土人骨の調査」  
市川 彰(名古屋大学大学院博士後期課程)
- ・「エルサルバドル共和国における土壌からみた農耕の実態について」  
伊藤 伸幸(名古屋大学)

##### <後半>

- ・「住民参加によるインカ道の保全と活用に関する人類学調査速報—ペルー・アンカシュ県・コンチュコス地域の事例から—」  
大谷 博則(奈良大学大学院博士後期課程)
- ・「ペルー中央高地、ワンカ・ハサ遺跡、D字形建築の祭祀性」  
土井 正樹(国立民族学博物館外来研究員)

- ・「パコパンパ遺跡から出土した人骨の生物考古学的研究」  
長岡 朋人(聖マリアンナ医科大学)
- ・「ペルー北高地パコパンパ遺跡における宗教的権威の交代」

関 雄二(国立民族学博物館)、ディアナ・アレマン(ペルー国立サン・マルコス大学)、鵜澤和宏(東亜大学)、長岡朋人(聖マリアンナ医科大学)、荒田 恵(総合研究大学院大学)、坂井正人(山形大学)、ダニエル・モラーレス、フアン・パブロ・ビジャヌエバ、マウロ・オルドーニェス(以上ペルー国立サン・マルコス大学)

#### —研究発表—

##### <前半>

- ・「形成期アンデスにおけるシカ狩猟」  
鵜澤 和宏(東亜大学)
- ・「テオティワカンにおける住居建築の特徴と変化」  
福原 弘識(国立民族学博物館外来研究員)
- ・「メシーカ人による伝統の摂取と変容」  
井上 幸孝(専修大学)

##### <後半>

- ・「コパン遺跡北部住居群、9L-22 グループにおける建築拡大過程の復元」  
今泉 和也(北海道大学大学院博士前期課程)
- ・「王朝崩壊後のコパン」  
中村 誠一(サイバー大学・早稲田大学)
- ・「マヤ文明の環境利用：セイバル遺跡の石器を中心に」  
青山 和夫(茨城大学)

- ・「グアテマラ、セイバル遺跡より見たマヤ文明の起源」  
猪俣 健 (アリゾナ大学)

なお、開会と閉会の言葉は、寺崎秀一郎 (早稲田大学) が述べ、座長は以下の会員が務めた。

- 調査速報—  
＜前半＞多々良 穰 (東北学院榴ヶ岡高等学校)  
＜後半＞芝田 幸一郎 (法政大学等非常勤講師)
- 研究発表—  
＜前半＞土井 正樹 (国立民族学博物館外来研究員)  
＜後半＞長谷川 悦夫 (埼玉大学等非常勤講師)

---

---

## 事務局からのお知らせ

---

---

### 1. 日本学術振興会第一回育志賞を受賞

市川彰会員 (名古屋大学大学院) が、日本学術振興会第一回育志賞を受賞されました。市川会員は本学会選考委員会の審議を経て、古代アメリカ学会より同賞に推薦されていたものです。市川会員の益々のご活躍をお祈りいたします。

日本学術振興会 育志賞のホームページはこちら  
<http://www.jsps.go.jp/j-ikushi-prize/kettei.html>

### 2. 会誌バックナンバー販売のお知らせ

『古代アメリカ』のバックナンバーを 1 冊 2000 円で販売しております。購入をご希望の方は、ご希望の号数、冊数を古代アメリカ研究会事務局までお知らせ下さい。会誌と振込用紙をお送りいたします。なお、第 3 号は品切れとなっております。また他に残部希少の号もございますので、品切れの際はご容赦下さい。

### 3. 会誌『古代アメリカ』の原稿募集

会誌『古代アメリカ』第 14 号 (2011 年 12 月発行予定) に掲載する原稿を募集します。投稿希望者は、会誌に掲載されている寄稿規定、執筆細目をよくお読みください。論文原稿は、随時募集し、査読を終えたものから (原稿受領後 1～2 ヶ月で査読終了予定) 順次掲載する予定です。

投稿希望者は、編集委員会宛 (下記井上宛) にメールまたは郵便にてご連絡ください。編集委員会より「投稿カード」を配布致しますので、これを提出原稿に添付してください。

なお、原稿掲載の可否は、規定による査読結果を踏まえて、編集委員会が決定します。

\* 投稿に関するお問い合わせ  
井上 幸孝 (編集委員長)

〒214-0033 川崎市多摩区東三田 2-1-1  
専修大学文学部  
Tel : 044-900-0547  
Fax : 044-900-7848  
E-mail : [takaio@isc.senshu-u.ac.jp](mailto:takaio@isc.senshu-u.ac.jp)

### 4. 会報「30 号記念号」の原稿募集

今回の会報は、節目となる第 30 号です。総会でお知らせしたように、会報の内容を充実させ、会員の皆様はもちろん、HP を通じて多くの方々に古代アメリカの情報を広げたいと考えています。以下の要領で皆様からの原稿を募集しますので、特に若い会員の皆様には、ぜひ積極的にご投稿くださいますようご協力お願いいたします。

#### ◎内容

#### ○エッセイ、論考など

特にジャンルは設定しないが、古代アメリカ学会の会報記事としてふさわしいテーマ。

#### ○古代アメリカ関連の学会・研究会等の情報

会員が所属する学会・研究会・勉強会・公開講座などの情報・発表報告。

#### ○調査・研究の通信

最近行った調査、研究、関心等に関する紹介。会誌『古代アメリカ』には投稿しないような簡易の情報も可。

#### ○「会員の活動状況」

従来は会誌『古代アメリカ』に掲載していた「会員の活動状況」を、今後は会報に載せることになりました。なお、HP には掲載しません。

対象期間：2010 年 4 月～2011 年 3 月

(従来期間から変更しています)

#### ○新刊紹介

古代アメリカ関連新刊書籍の紹介。

#### ○その他

会員が必要と思われる情報。

◎形式

○原稿字数は、写真・図版を含めて 4000 字（会報 2 ページ分）以内とします。

○原稿は word ファイルで作成してください。その他のファイルについては、会報担当まで事前にご相談ください。

◎掲載

○掲載に当たっては、会報担当委員から内容についての問い合わせや修正等のご相談をする場合が

あります。また、投稿原稿が多数の場合は当該号では掲載されないこともあります。掲載の可否については、事務局にご一任ください。

○投稿原稿以外に、会報担当委員から依頼した原稿も掲載する予定です。

◎投稿先・締切

○運営委員（会報）多々良穰宛に、添付ファイルの形でメールにて送信してください。

送付先アドレス yutatara@hotmail.com

（会誌とは異なるのでご注意ください）

○投稿締切 5 月 31 日（火）

○発行予定 7 月 27 日（水）

---

---

## 第 8 期（2010. 10～2012. 9）の新役員紹介

---

---

先述のように、選挙結果と加藤泰建新会長の任命により、第 8 期役員が決定しました。学会の運営につきまして、会員の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。

会 長 加藤 泰建（埼玉大学）  
代表幹事 井口 欣也（埼玉大学）  
監査委員 大平 秀一（東海大学）  
長谷川 悦夫（埼玉大学等非常勤講師）

事務幹事 山本 睦（日本学術振興会特別研究員）

運営委員

会計 浅見 恵理（総合研究大学院大学博士課程）

編集 井上 幸孝（専修大学）

吉田 晃章（東海大学）

芝田 幸一郎（法政大学等非常勤講師）

広報 芝田 幸一郎

研究 青山 和夫（茨城大学）

会報 多々良 穰（東北学院榴ヶ岡高等学校）

---

---

### <編集後記>

今から 16 年前、「日本の古代アメリカ研究は盛んになってきたが、それぞれの研究者がやっているものを互いに発表し合えるまとまった組織を作りたい」と中村誠一氏（現サイバー大学・早稲田大学）が話してくれた。その趣旨に賛同して、仙台に「新研究会設立準備委員会事務局」を設置した。そのころの名簿を見ると、当時集まった諸氏はわずかに 24 名。研究会への参加呼びかけと会則作りに時間をかけ、その 2 年後の 1996 年、大貫良夫氏（現東京大学名誉教授）を会長として、50 名からなる「古代アメリカ研究会」が発足した。2003 年には、現在の「古代アメリカ学会」に名称変更し、それ以来レベルの高い研究発表がなされてきた。

今回、6 年ぶりに研究大会に参加させていただいた。12 月は職場（高校）での行事と重なることが多く、研究大会開催地との距離もあったため、なかなか参加できなかった。久しぶりに学会の雰囲気を感じ、参加人数の多さや発表内容の充実ぶりに大いに知的好奇心を刺激された。仕事の

関係上、現地で調査することは非常に困難であり、他の研究者が出す報告書や論文を頼りに研究を整理するのがやっとなのである。しかし、そんな私に課せられた仕事は、専門の研究者と古代文明に興味を持っている一般の方々との橋渡しだと思っている。

今期から、会報担当の運営委員を仰せつかった。以前の役員をやっていたころに比べ、大きくなった組織への戸惑いもある。しかし、この会報を充実させ、会員の方々の情報交換の場とするために、微々たる力ではあるが、当学会の発展に貢献していきたい。投稿していただいた会員の方々をはじめ、本号の会報発行にご協力いただいたすべての方々に感謝申し上げるとともに、会員の皆様のこれまで以上の積極的な情報発信をお願いしたい。（多々良 穰）

発行 古代アメリカ学会  
発行日 2011年1月31日  
編集 古代アメリカ学会運営委員（会報担当）

古代アメリカ学会事務局  
〒338-8570  
埼玉県さいたま市桜区下大久保 255  
埼玉大学教養学部 井口欣也研究室気付  
E-mail: [jssaa@sa.rwx.jp](mailto:jssaa@sa.rwx.jp)  
郵便振替口座：00180-1-358812  
ホームページ URL <http://jssaa.rwx.jp/>